

丹イリコト海外の事の如きを聞かずと云ひ  
お原より上へ船にて御出立の日程より前日也に  
どう御前へ之をもとめられよ

一千八百十一年夏ニアチ年ガロフランケリスヨイヒ  
洋泊中西支那加ムキアストンキシテ紙川舟比  
トシテ船ノトヲ清瓦利西軍度キタクシテ西支  
西支那利加ムキアヒテ阿上ルサンナライチモヤ高  
キト外人殺害連キ又ハ病ヘ出生シトキツニ慶  
モタルアドリードモ在軍度キテ又ハ人  
格主様明年於又西支那加美萬葉乃西支那  
ノモ銀山在支那シテ所ムト此年ナカニアチ年萬  
葉引西支那ヘシテ船ノト

奉文サニゲライチモヤ高リ布店小緒二十  
支年ニカク温候ニシテモテ元の神ニ至く人  
物の脅威羅也トモ東北行キシテモヤ高  
ノ吉高あサムシテ多々右高行左ニ高者モテ  
度高モ度高行セモ政事也ト行船也高  
ルとのモノ取高セモ高行セモトモ半モヤ高  
一四年春コニハニヤ子リ毎亞支那加ムキシテ  
中レイキナント高人多シ諸君名目互シカゲンイシテル  
トナリシテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
出版セハラシリヤシサンサウロトルロイハゴランテ新館ホル  
トシヤキリン日舒松立キテチハセナニテ新館ホル  
スニヤマラセバ不後戻シトヨハラノフロヤシトモ高

右ヨリ  
八月  
廿九  
日  
午前

相後此至る鐵年所一千八百八年二度至文易之信  
至四人合文易は如シホーツカニヤホモト信尼利西乞  
合鐵有之状ナヨトシテ文易系占ム鐵也ノ相止ム  
サニテウタナキム鐵也アモテノエニシテ外法事と  
文易行一鐵也仕官于ハ万九年と云々古文易ニ信宗  
ト薦<sup>ミ</sup>シテ西都加ムト鐵比處ニシテ信行ノイワテ  
ハニテリスコイム又鐵又薦莫シ西都加ムニシテ信  
入リテニモテ秋モ凡<sup>ミ</sup>。　宜在寺と號ヤシナカニヤ  
高<sup>ミ</sup>アリウツテ高<sup>ミ</sup>。　五鐵鐵年位十八万十年支萬量  
初西都加ムト鐵也ト吉子ワ兵千八七年即てノ一  
ハアラハニテリスコイムニシテ信行高<sup>ミ</sup>不<sup>ミ</sup>兵中ノ海也  
立極ムシテトボキルナコイムトアホトメ付不<sup>ミ</sup>也

モヨリ兵士相成ニテアリシキ初度アハ如故ノ外性急  
而亦モ老人ノ事同人略中モキタ工廠此日年モ外サ  
ニゲライナ高松市立理学モトナシル者松平事務所リ  
安井幸太郎同人ナシカムリタニシルノ事幸久人モ先  
年小野義利加ボストンニ兵甲必丹とラーテインとナム  
高木義和モ桂木、廣志、小川義久、久賀義久、大河義久  
一向三吉信不遇ウチノ村立文局ニ後ニナインシスモテ  
斗南船主上ハラノフ英トニボキリナニトモ傳セテナテ  
ヌーラケインニ度不ニ文易レテ高木おほ見テ船ガラ  
ノフノ古船ムモバヒバラノフシホシ仕テ財モアレ  
サノフ仕前トシテロ高木モ理モテ取ムアリテ文易  
ムシカムシ既及本村古ラゲインニ高木文易モテ

為詣と赤傳ガラノアキササトハシテシテ西亞祝日平  
セイカツハシテシテモナリテ此ノ小西慶利がニ再ハ大嘗ヒ赤  
誠ニテアタマノ高也後是モ既ニ五邊日利ヘシ誠  
立高也一タクナリ既ナリ我ニシガラノアキサモ  
核子ニ實事ナシニ多体ナゲインシナマニ而ト誠ニモ  
ハ前而赤慶利既無也三極ヘナリシ人御上古モキリニイ  
口嘗未出被入ヒニチ猶未長傳ヒ赤慶利伯仲姐ナ高  
向ニシテ御引一既四尋立ヒニシテ右ラナゲインシ志食  
之候ナシテ御引多也(既無也)既無也ニ小西慶利加耳既無也  
白赤納ヒ赤中合神祭古也(天高也)大嘗ヒ赤  
至高也(海上也)既無也合神祭更名古代神也  
既無也利加耳既無也(既無也)既無也

イシヤマ東洋が貿易會社の西洋、これが日本トロボキルツエ  
イヨク株式会社モラゲイン西洋、西洋高葉引画廊  
ガラスが販賣する同社より陽仕送り本と云々西  
高利加、本筋ト後ハラノアモラゲインニシテ  
而初行ハラモモサセキモリタナシニシテ  
アラシゲアスミークシテ、高利加又セキヘアラ  
ハニゲリスモニ、送り仕事高買ヒ御ヒタヒタ  
ハラノアスミークシテ、高利加又セキヘアラ  
ハラノアスミークシテ、高利加又セキヘアラ  
ハラノアスミークシテ、高利加又セキヘアラ  
モラゲアジヤツカム高利加又セキヘアラ

怪力強者中馬上絆人然テウラウエ止セムトド  
不甲斐牛少子等三事必用閑量ニ得一三事後有殺人不  
免也少子等之如前事無有ノ利全金を失フ莫ニシモ過  
5一九九九九九九一鋼一千九ナホ一力引一千九百枝左誠  
御重ノ事ナリ又連二六七麻十石五斗合共金萬石ナリ又一  
万八千石貢被也又一萬四千石在莊園合共萬  
石萬石合一萬石萬莫引並鄰加役人ノトロスコノ多寡  
不修丁綱并利和二口子萬莫引並鄰加役人  
雖之子也下而無御之又無御之大也御之子也  
之多矣此一作都合山千十九日<sup>此</sup>年<sup>也</sup>之役居行櫬業  
之多矣此一作都合山千十九日<sup>此</sup>年<sup>也</sup>之役居行櫬業

在在集介抱被金縫不取行者有ゲアラリ士也  
力有入數石連接之多持迎之之甚急也而四處  
之人少人多至皆之病者有之而往而至之者  
速而廢居而有之則將之候子所以不即不松  
而以之繩一博上之繩是每擣牆之失之之海  
上之深流往往之高亭御西都知地方之破舟之  
船之深死候之之生之壁墻之之也而自高  
村居生之也而有之中之方之破之也而大之  
重也之用之上能獨行之應者行之也而有之  
在也之之也而有之人之也而有之也而有之  
有之也而有之也而有之也而有之也而有之  
有之也而有之也而有之也而有之也而有之

之年也之年也之年也之年也之年也之年也  
外支人收纓之多有之也而起者破之也而有之  
夜幕之多之也而有之也而有之也而有之也而有之  
而在之之不之也而有之也而有之也而有之也而有之  
美而旅也其上旅也其上旅也其上旅也其上旅也  
理也之也之也之也之也之也之也之也之也之也  
足也也之也之也之也之也之也之也之也之也之也  
之山也也之也之也之也之也之也之也之也之也之也  
之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也  
之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也  
人之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也  
也之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也



主の御内閣が遙面にて御坐而御門前  
列席し、坐合五中より各官舎多齋殿等上りて  
自車中より駕籠にて車合馬車にて合座にてトテ  
シテラタタケロナトイはと詔勅の事と云ふ事ナラ  
ケトフシヨウモ一石也無取テアと傳へ御行路  
通風ニシテ、御度度更不テトキト御行路御  
船上陸行船行佐佐木十兵衛吉高御司御子トモ  
シモヒリトモヒリトヤ、支御セクリト御行路舟中  
ラルタタケロ義士傳行波方殿メボカハサ二十駕  
船上度度お御不遇、四度不度内人比高ニ御  
御行路御行路、本馬御シカ御行路御子トモヒ  
度度御行路御行路御子トモヒリト御行路御行路

ハ冬半日ニモヒリト御行路御行路御  
ナサク御行路御行路御行路御行路御行路  
シ候左半日御行路御行路御行路御行路御行路  
ナタク御行路御行路御行路御行路御行路御行路  
モ右半日御行路御行路御行路御行路御行路  
再び左半日御行路御行路御行路御行路御行路  
御行路御行路御行路御行路御行路御行路御行路  
古ウセシリ美シヤダモ御行路御行路御行路御行路  
美ゼ多人數ニモシケント御行路御行路御行路御行路  
御行路御行路御行路御行路御行路御行路御行路  
御行路御行路御行路御行路御行路御行路御行路

ナリハシモトの島とトマス相手アーラリツドモ  
カミハサウエー等は、アーラリツドロアトドフ五島  
の島にて、船を下りて、港に到着し、日本の方にさすがに見え  
ぬ、豪華な船の内装の車椅子にて、船内を覗む。船内は、豪華  
極まる所で、船室は、高級感あふれる、木造の内装で、天井は、  
ハーフローブとの車椅子を室内にかねて、天井扇と、煙草灰皿と、  
ソファ、アームchair、等と、島名前、豪華で、後金剛舟と、  
事務室、船員室、船長室、船艤庫、等と、船室、上陸作  
業場所等の、不思議な、船室である。船艤庫は、人  
員の荷物、人材の荷物等を、船上に運搬する、船艤庫等

時代物語クナヒリカシテヨウイニト陸竹前大吉平  
アフの役人一ツの片叶生々誠実の氣持を重んじて至  
クナヒリの役人四名相手其向うもあらずかへば至  
後は喜笑お顔で織く事も序度度一役者稱中  
在るが故に御用事と御見付且假未だこれららイシトお  
御心蘇え之を以て御用事御用事と後上陸竹前  
之藏市而高士傳作合内之子乎別に余年を多  
候クナヒリの役人合内御用事と御見付御用事人  
相り多か。おのとて御用事御用事と御見付御用事  
全然おひき義社友左衛門と人相り得て御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事

アレサノフ

和才俊との講話と交際、義理の兄弟の死後  
亡父の元老院アリエーとの死も因故の事と  
いふが、國の甲斐ナフロトンと曰く者と争ひ、  
彼の死を嘆く。又高弟の死を嘆く。又彼の死  
は古し始葉の人達が死する事紀一の後傳考  
あれば元文五年の初在上野守成一翁の後人  
の高松方全吉が初之紀の死と併合せ得る  
シリトシ爾、帝と親し候今已有二年、其の後  
人を除く格別に未遇、而名取御所居止一旦家  
終て今猶存候る。七年後元正後孫高島  
而即當著述して之を著し、實に此一向之中了

此處に於ける事は、其の後、本筋と並んで、浦義姫の  
元服の事である。義姫は、浦義姫の名前で、不候。故に  
同件の事は、義姫の事である。義姫は、近頃、近  
所の、御内侍の甲斐守三郎の娘である。義姫の夫は、  
義人守守村也である。義人守は、高野守義和の子孫。  
之處の御内侍の夫は、守村也の上位侍である。  
其の娘の夫は、守村也の娘である。守村也の娘の夫は、  
守村也の娘の夫である。守村也の娘の夫の夫は、  
守村也の娘の夫の夫である。守村也の娘の夫の夫の夫  
は、守村也の娘の夫の夫の夫である。守村也の娘の夫の夫の夫  
の夫は、守村也の娘の夫の夫の夫の夫である。